



東日本大震災における民俗文化財のレスキュー活動

ひだか しんご
日高 真吾

民博 文化資源研究センター

保存学をはじめとする各分野の専門家は、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに、被災した文化財を救出し、復興させるための研究を本格的におこなってきた。甚大な被害が発生した東日本大震災では、これまでの知見にくわえ、より多くの人びとの協力と長期的視野にたった取り組みが必要だ。震災から1年をへた現在、文化財の復興のためにもとめられるものとは。

被災文化財の支援活動

未曾有の被害を引き起こした東日本大震災では、多くの文化財も被災した。そして、これらの被災文化財のなかには民俗文化財も含まれる。

わたしは今回の東日本大震災に対して、文化庁の呼びかけで結成された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（本部：東京文化財研究所）」（以下、救援委員会とする）にメンバーとして参加した。これは、人間文化研究機構が救援委員会に協力することを決定し、活動費を予算化したことで実現したものである。救援委員会でのわたしの活動は、民俗文化財の保存の専門家として、おもに民俗文化財のレスキューを担当することとなった。

被災民俗文化財のレスキュー活動

救援委員会がおこなう被災文化財の支援活動は、文化財レスキュー事業として位置づけられた。レスキューの対象は有形の動産文化財であり、それらを救出、一時保管、応急措置を実施することが救援委員会のおもな活動内容である。ただし、ここで文化財とするものは、市町村指定や県指定、あるいは国指定といった指定文化財だけを指すものではない。指定されていないものであっても、被災地において文



津波で壊滅的な被害を受けた文化財収蔵庫

化財としての価値づけができるかと判断されるものは、すべてレスキュー事業の対象としたのである。

救出活動は、まず、周囲のがれきの撤去作業で巻き起こる粉塵やヘドロなどの匂いへの対処、暑さ、さらには破傷風の懸念に直面する作業となった。また、電気もとおっていない被災した博物館施設での作業は、真っ暗な場所が多く、床にがれきが散乱する不安定な足元と天井からの落下物にも備えなければならぬ。そのため、マスクはもちろん、ヘルメットや長そで・長ズボンの作業服、分厚い作業手袋や安全靴、ヘッドライトなどの装備が

今後の文化財レスキュー活動

現在、文化財レスキュー活動は、多くの文化財関係者の協力によって、一段落し、次の活動へと向かう転換期となっている。これまでの活動はあくまでも緊急事態なかでの活動であり、被災文化財が本来の文化的価値を取り戻したわけではない。ようやく、被災文化財が本来の文化的価値を取り戻すための活動のスタート準備ができたという段階である。そこで、次の活動では、保存科学の研究者としては、津波に含まれた塩分がどのような劣化を誘引させるのかを明らかにし、本格的な保存修復方法を考えていきたい。また、民博に所属している研究者としては、この震災の記憶を後世に伝えるため、震災前の生活の記憶、震災後の復興活動をテーマとした企画展やシンポジウムを開催したいと考えている。これから本来の生活環境を復興させていかなければならない被災地では、もう少し外からの支援活動が必要だと思う。民博の教員であるわたしができることは何か、被災地の復興活動の邪魔にならないような支援活動の在り方を考え、実践していきたい。

必要となる。このような環境のなか、床に散らばっているガラスの破片を取り除き、津波が運んできたヘドロをかきだしながら、埋もれている民俗文化財をひとつずつ探しだしていくのである。

一時保管の作業は、被災現場から一時保管場所へ移送することが中心となる。被災現場となった施設では、がれき撤去などの作業が進められると、がれきに混入した文化財も一緒に廃棄されることがある。また、残念ながら火事場泥棒のような輩がどうしてもできてしまい、文化財の盗難ということも発生する。したがって、被災現場から救出した文化財を、



救出した文化財の移送作業

施錠できる安全な施設に一時保管するのである。

応急措置は、救出後の被災文化財の劣化が進まないように必要最小限の保存措置をおこなう作業である。東日本大震災で救援対象となった文化財のほとんどは、津波で被災したものである。したがって、救出時の文化財はヘドロや砂の付着をはじめとする表面の汚損、被災後からの時間の経過で発生したカビによる生物被害というものが観察された。また、地震や津波の衝撃による破損や棚からの転倒や落下の衝撃による破損も確認された。わたしが担当したレスキュー事業対象の民俗文化財は、宮城県、岩手県を合わせて約五〇〇〇点。これらの民俗文化財の応急措置を雪の降り始める季節までにはどうしても終わらせたい。そのためには作業人員の確保が必要となるが、そうなった場合、文化財の保存修復の専門家だけではとても対応できない。そこで、民俗文化財の応急措置では、一番の汚損原因となっている文化財の表面に付着したヘドロや砂の除去、繁殖しているカビの殺菌処理を最優先にすることとした。そして、実際の作業は、日本博物館協会に所属している全国各地のミュージアムの学芸員の方とおこなった。

公開シンポジウム

「文化遺産の復興を支援する
— 東日本大震災をめぐる活動 —
2012年3月17日・18日 国立民族学博物館

東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金活動をおこなっています。
公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 <http://www.bunkazai.or.jp/>